10-11 世紀クリュニー修道院と在地領主
—Saint-Gengoux-le-National 関連諸権利に見る紛争とその解決—

法花津晃

1970 年代以降の紛争解決研究の方向性を決定づけた F. チェイエットと S. D. ホワイトの研究により、公的秩序の解体した社会における紛争は、当事者の名誉とプライドを考慮した交渉、そして友人や助言者による仲裁や和解によって解決へ促されたことが明らかにされた。他方で、中世の紛争とその解決は、公的裁判の枠組みよりもむしろ仲裁や和解に依拠しているため、紛争解決研究ではこの社会的圧力を可能にする隣人・友人関係にも関心が寄せられている。例えば、10 世紀から 11 世紀前半のクリュニー修道院と在地領主を対象とした B. H. ローゼンワインは、土地のギブアンドテイクによって形成される両者の友誼関係に着目し、紛争解決におけるその重要な役割を指摘している。

本報告では、ローゼンワインの描く紛争解決のモデルが、当該期のクリュニー修道院と在地領主の間においてどれほど妥当性を持つのかを検討した。分析対象として、10 世紀中葉から 11 世紀にかけて Saint-Gengoux-le-National 周辺において諸権利を持っていた在地領主カペラ一族とクリュニー修道院との間に見られる、友誼関係構築ならびに紛争解決の事例を取り上げた。

クリュニー修道院とカペラ一族は、958 年から 1035 年にかけて、サン・ジャングー教会と付属物件を相互に贈与することによって徐々に友誼関係を形成した。この際、以下の三点に着目して分析を試みた。まず第一に、同教会が修道院へ贈与される際、その存命中の保有権がきまってカペラ一族へ返還されていることである。修道士は同教会を修道院所領に編入するよりも、むしろ同教会の用益権をカペラ一族へ返還し、両者の友誼構築のために積極的に利用したことが窺える。第二に、両者の間で相互に繰り返し贈与された同教会は、両者の友誼関係を記憶し、象徴する役割を担っていたことである。このことは、両者の間で同教会が贈与または交換される時に、過去の贈与行為が常に想起され、両者の友誼が再確認される事実からも窺える。最後に、このように形成された友誼関係が両者の紛争解決の場面において果たした役割である。この役割は 1035 年頃の紛争解決の事例で端的に示される。その事例では、上級権力者である伯が出席していながらも紛争解決において決定的な役割を果たさず、逆に、この両者の友誼関係こそが紛争を解決に向かわせたことが明言されているのである。

以上のことから、10 世紀から 11 世紀前半におけるクリュニー修道士と在地領主の紛争解決に関するローゼンワイン・モデルは、このカペラ一族の事例でもある程度の妥当性を持つと結論づけられる。

加えて、本報告ではローゼンワインが分析を停止した 11 世紀中葉以降における両者の諸関係についても検討を試みた。11 世紀中葉を迎えても、カペラ一族とクリュニー修道院の

紛争解決の場面では物件の交換が行われていた。しかし、両者の友誼の象徴であった同教会が交換の対象として提示されることは今後確認できないのである。また、カペラ一族から修道院への贈与事例を検討しても、用益権を保全するような贈与はひとつもなく、修道士による所有権が示された文言が散見される。これらの事実から、カペラ一族から修道院へ贈与された物件に関して、これまでの見られた両者の曖昧な権利関係が精算され、当該地における修道院の領主制形成が進行する過程を確認することができた。

以上の報告に対し、出席者からさまざまな意見をいただいたが、特に重要な指摘をひとつ取り上げたい。それは、ローズンワインが対象とした在地領主と修道院との社会的関係の形成と紛争解決の問題では、両者の関係強化を促した取引物件は土地であることが示されているが、本報告で取り上げた物件は教会であるため、同一次元でこの議論するには問題性を含んでいるという指摘である。報告者自身も、ここで対象とした物件が教会であり、土地のギブアンドテイクとは異なる側面から両者の関係が形成されたであろうことはもちろん自覚している。また、11 世紀中葉に本格化するグレゴリウス改革の前においては、教会をめぐる世俗領主層とクリュニー修道院の権利関係をもう少し慎重に検討する必要があったが、本報告で取り上げることができなかった。近年、フランス学界では紀元千年頃の変動に代わり、グレゴリウス改革期における社会変動を考察する傾向も少なからず見られ、在地領主と修道士との間の友情関係、友情の断絶、両者の関係の再編の問題がそこでは取り上げられている。本報告で取り上げたカペラ一族とクリュニー修道院のサン・ジャングー教会をめぐる社会的関係、権利関係の問題も、このような観点の下で再検討されなければならない。

刊行史料

BERNARD, A. et BRUEL, A. (éds.), *Recueil des chartes de l'abbaye de Cluny* (Collection des Documents inédits sur l'histoire de France), Paris, 1876-1903, 6 vol.

参考文献

BROWN, W. C. et GÓRECKI, P. (éds.), *Conflict in medieval Europe. Changing perspectives on society and culture*, Aldershot:Burlington, 2003.

CHEYETTE, F., "Suum Cuique Tribuere," dans *French Historical Studies*, 6, 1970, pp.287-299.

GEARY, P. J., "Vivre en conflit dans une France sans état: Typologie des mechanismes de règlement des conflits, 1050-1200," dans *Annales E.S.C.*, 41, 1986, pp. 1107-1133 .

——, "Extra-Judicial Means of Conflict Resolution," dans *La giustizia nell'alto Medioevo (secoli V-VIII)*, Spoleto:Presso la sede del Centro, 1995, pp. 569-601.

LE JAN, R., "*Malo ordine tenent.* Transferts patrimoniaux et conflits dans le monde franc (VIIe-Xe siècle)," *Les transferts patrimoniaux en Europe occidentale VIIIe-Xe siècle*, dans *Mélanges de l'école française de Rome*, 111, 2, 1999, pp. 951-972.

MAZEL, F., "Amitié et rupture de l'amitié: Moines et grands laïcs provençaux au temps de la crise grégorienne (milieu XIe-milieu XIIe siècle)," dans *Revue historique*, 307-1, 2005, pp. 53-95.

——, "Pouvoir aristocratique et Église aux Xe-XIe siècles. Retour sur la “revolution feudale” dans l’œuvre de Georges Duby," dans *Médiévales*, 54, 2008, pp. 135-150.

ROSENWEIN, B. H., *To be the neighbor of Saint Peter. The social meaning of Cluny's property, 909-1049*, Ithaca:Cornell University Press, 1989.

ROSENWEIN, B. H., HEAD, T. and FARMER, S., "Monks and their enemies: A comparative approach," dans *Speculum*, 66-4, 1991, pp. 764-796.

WHITE, S. D., "*Pactum... Legem Vincit et Amor Judicium*: The Settlement of Disputes by Compromise en Eleventh Century Western France," dans *The American Journal of Legal History*, 22, 1978, pp. 281-308.

——, "Tenth-Century Courts at Mâcon and the Perils of Structuralist History: Rereading Burgundian Judical Institutions," dans BROWN, W. C. and GÓRECKI, P. (eds.), *Conflict in Medieval Europe. Changing Perspectives on Society and Culture*, Achgate, 2003, pp. 37-68.